

おもひのまぎらはしなり、

〔源氏物語紅葉賀〕おとこ君源氏君源は、てうはいにまいり給とて、さしのぞき給へり、けふよりはおとなしく成給へりやとて、うちゑみ給へる、いとめでたうあいぎやうづき給へり、いつしかひるなをしすへて、そゝきる給へり、三尺のみづしひとよるひに、まなぐしつらひすへて、又ちいさきや共つくりあつめて奉給へるを、所せきまであそびひろげ給へり、なやらふとて、いぬきがこれをこぼち侍にければ、つくろひ侍るぞとて、いとだじとおほいたり、げにいとこゝろなき人のまわざにも侍かな、いまつくろはせはべらん、けふ正月はこといみして、なない給とて出給ふけしき、いと所せきを、人々はしにいで、みたてまつれば、姫君紫もたちいで、みたてまつり給て、ひるなの中の源氏のきみつくろひたて、内にまいらせなどし給。

〔源氏物語野分〕物さはがしげなりしかば、とのゐもつかうまつらんと思給へしを、みやのいと心ぐるしうおほいたりしかば、なん、ひるなの殿は、いかゝおはすらんととひ給へば、人々わらひて、あふぎのかせだにまいれば、いみじきことにおほいたるを、ほどくしくこそ吹みたり侍りにしか、此御とのあつかひにわびにて侍りなどかたる、

〔紫式部日記〕わか宮一條の御まかなひは、大納言のきみ、ひんがしによりてまいりすへたり、ちいさき御だい、御さらども、御箸のだい、すはまなども、ひいなあそびのぐとみゆ、

〔榮花物語初花〕こひめ君藤原は、このつ十ばかりにて、いみじうつくしうひ、なのやうにて、こなたかなた、まぎれあるかせ給ふ、

〔榮花物語御著裳〕大宮のおまへ藤原彰子ひめ宮禎子を、見たてまつらせ給中大宮、東宮朱雀を、こそきよらにおはしますと、覺しめしけるに、是はいとこまかにうつくしう、あけくれ我物にて見奉らば、やとのみ覺しめされけり、ないしのすけ、たゞいまの御ありさまながら、うへ一條後に